doi：10. 20776/S13482084-70-P37
千葉大学教育学部研究紀要　第70巻　37～44頁（2022）

教育心理学史序説―第３報―

大　芦　　治
千葉大学・教育学部

The Introduction to the History of Educational Psychology (3)

OASHI Osamu
Faulty of Education, Chiba University, Japan

前報（大芦，2021），前々報（大芦，2020）につづき教育心理学の起源と初期の歴史に関して解明を試みた。今回は２つの大学の教員養成課程，および，１校の師範学校，合計３校のカリキュラムにおける心理学関連科目の変遷を，各校のカタログを通覧し，検討した。その結果，⑴３校とも1860年代から“Mental　Philosophy”等の名称で心理学関連科目が配置されていたが，これらは，スコットランド学派の流れを汲む心理学から新しい心理学に入れ替わる過渡期的なもので今日一般に考えられているような教育心理学とは異なるものであった。⑵1880年代から1890年代にかけて，“Psychology”や一部で“Educational Psychology”という名称で授業が開講されるなど，教員養成課程にも心理学が積極的に取り入れられ始められたが，一定の形で定着を見るには至らなかった。⑶今日の教育心理学とほぼ近い形で“Educational　Psychology”が開設されるようになったのは，1920年近くになってからであった。３校における教育心理学の歴史的な変遷は以上のような共通性も見られたが，実際は各校個別の背景も大きく影響しており，これらを以って結論とするのはまだ尚早であろう。19世紀末から今日に至るカタログを公開している旧師範学校，師範大学等はその数20校程度に上り，まずは，それらすべての分析が必要だからである。

Following the previous reports (Oashi, 2020, 2021), the author reported on the origin and the early history of educational psychology. This time, the author used the university catalogs to examine the transition of psychology-related subjects in the curriculums of two universities and a normal school. As a result, classes such as “Philosophy of Mind” have been held at all three schools since the 1860s, but they were transitional classes. Soon, the Scottish Psychology was replaced by the “new” Psychology. From the 1880s to the 1890s, Some classes were held under the names of “Psychology” or “Educational Psychology”, but they did not take root. Further investigation requires analysis of many catalogs.

キーワード：教育心理学（Educational Psychology），心理学史（History of psychology），カタログ（Catalog），
精神哲学（Mental philosophy, Psychology）

はじめに

著者は，前２報（大芦，2020，2021）において教育心理学（educational psychology）の起源と初期の歴史について，入手可能な数少ない文献をもとに検討を加えてきた。

そのなかで，著者は，Charles（1976，1987）の著書の記述をもとに，1890年，イリノイ大学（University of Illinois）おいて“Educational Psychology”というタイトルの講義がはじめて開かれたことをとりあげた。さらにそれを裏づけるものとして，当時のイリノイ大学のカタログ（わが国では一般に「履修要覧」「履修要綱」「講義概要」などと言われるもの）に記された教育心理学に関する記述などを紹介した。前報（第２報）でも述べたが，そのイリノイ大学のカタログは，インターネット・アーカイブとして公開されているものである。著者は，偶然，それを見つけた。

連絡先著者：大芦　治　oashi@faculty.chiba-u.jp

ところが，その後，再度，インターネット上で検索を試みたところ，19世紀から20世紀前半にかけてのアメリカの大学，師範学校のカタログが，相当数，公開され利用可能な状態になっていることが分かった。今更のように，適切な史料収集を行わず論をすすめていた己の不明に恥じ入るばかりであるが，とにかく，それらを入手し，検討してみることにした。今回は，これらの史料の分析を試みた結果の一部を報告することにする。

カタログの収集

カタログの収集に当たっては，「normal school catalog archive 1890」「university catalog archive 1890」の２パターンの検索語を主とし，必要に応じて個別に，追加の検索語を加えた。「1890」を検索語に加えた理由であるが，この語を省略した場合，検索結果として近年のカタログが多くヒットしてしまい，そのなかから今回必要としている年代のものを拾い出すには膨大な手間がかかるので年代を特定する必要性があったこと，そして，

その具体的な年代を決めるにあたってイリノイ大学で“Educational Psychology”がはじめて開講された1890年はとりあえず基準となり得るのではないかと考えたことによる。なお，検索を行った時期は2020年11月から12月ごろであるが，その後も適宜追加，削除などを行った。

収集結果の概要

検索の結果，インターネット上に公開された19世紀末ごろの師範学校，大学のカタログはおそらく100点以上に上ると推定されたが，ある単年度のものが１冊だけ公開されているケースや，脱落が目立ち継続性のないケース，保存されたファイル形式が閲覧できないなど，コンピューターの技術的な問題から実質的に利用が難しいケースも多かった。そこで，このうち，①歴史的な変遷が分かる程度の一定の年代幅（最低でも10年程度）に渡り体系的に公開されている，②PDF等一般的なファイル形式で保存され検索やダウンロードといった手続きが容易に可能で，実際に史料として利用可能な状態で公開されている，の２条件を満たしていると思われる20校のカタログを検討対象にした。

さて，現在，著者は，順不同でこれらのカタログの内容の検討を行っているが，本稿では，それらのなかから以下の３校の検討結果について報告する。

今回，個別に検討を加えた３校について

①　イリノイ大学（University of Illinois；現在のイリノイ大学アーバナシャンペーン校）(注１)

教育心理学（Educational Psychology）という名称の授業がはじめて開講されたのが，ここ，イリノイ大学であったことは，前報で詳しくとりあげた。今回は，カタログの分析を通して分かった教育心理学に関する事項を報告する。アーカイブで見ることのできるカタログのなかで最も古い1867年のものには「The course in Philosophy, Intellectual and Moral.」という記述がみられる。これまでも述べてきたスコットランド学派の系譜に属する哲学と思われる。誰が担当していたかについての情報はないが，翌1868年のカタログではfacultyのメンバー一覧に「Regent, and Professor of Philosophy and History. JOHN M. GREGORY, L L.D.」なる標記がある。このJ.M. Gregoryとは何者であるか，試しにインターネット検索をしてみると。すぐにかなりの量が見つかった。相変わらずの無知ぶりを恥じるのだが，それによればJ.M. Gregory（1822-1989）はイリノイ大学の初代総長（president，正式名称はRegent）として，また，『The Seven Laws of Teaching（1886）』という著書の著者としてかなり有名な人物であったようだ。ところで，Bolles（1993）によれば，初期のアメリカの大学やカレッジの組織の長は聖職者が占め，彼らが道徳哲学（Moral Philosophy）を担当していた（邦訳，p. 92）とのことである。Gregoryは聖職者ではないが，組織の長であり，彼が「The course in Philosophy, Intellectual and Moral.」を担当していたのではないかと思われる。Gregoryは1880年に総長を辞任し，後任にはS.H.Peabodyが就任する。Peabodyは「Mechanical Engineering and Physics」を専門としており，「Philosophy」を担当していたかどうかはよくわからない。そして，1890年，DeGarmoが教授に就任し，“Educational Psychology”が開設されることになるわけだが，そのあたりの経緯については前報（大芦，2021）で詳しく述べたので今回は省略する。

さて，1892-1893年度版カタログからはDeGarmoに代わりAssistant Professor of PsychologyにWilliam Otterbein Krohn（1868-1927）が就任したことがうかがえる。“Educational Psychology”も彼が担当することとなった。彼は，テキストとしてJames Sullyの『Teachers' Handbook of Psychology（1886）』を指定している。

これらについても簡単に見ておくと，まず，担当者のKrohnは，アメリカでもっともはやく精神科の患者を対象に病院で臨床活動を行った人物として知られる心理学者だ（Reisman, 1982）。つぎに，テキストとして使われた『Teachers' Handbook of Psychology』であるが，例によって目次を表１に示しておく。これを見ると，DeGarmoの用いたHerbartの影響下にあるテキストや，あるいは，moral philosophyとも異なる心理学とその教育への応用が考えられていたことに驚かされる。著者のSullyについての情報は少ない。アメリカ生まれだが，ゲッチンゲンでR.H.Lotze，ベルリンでE.DuBois-ReymondやH.von Helmholtzに学んだことなどからも想像できるように，W.Wudtとはまた別の経路から当時のドイツの生理学的な心理学の発展の影響を受けていたと思われる(注２)。

さらに進もう。1897-1898年度版になると心理学担当

表１　James SullyのThe『Teacher's Handbook of Psychology（1886）』の目次

第１章	心理学と教育（芸術と科学　教育科学の分野　教育に心理学を持ち込む） 心理学の範囲と方法（心（Mind）の科学的概念　子どもの心を観察する　一般的な心に関する知識）
第２章	心と体（心と体の関係　神経系　心的活動と脳　Brain Power）
第３章	知ること，感情，意志（心の３つの領域　感情，知ること，意志と心的能力，機能との関係　心的能力（faculty）の個人差　教師がそうした条件を学ぶ重要さ）
第４章	心的発達（心的発達の特徴　能力の発達の順番　能力の成長と経験　心的発達のほかの方向性　発達の内的要因と外的要因　発達の多様性　遺伝外的要因　教師と社会的環境）
第５章	注意（非自発的，自発的な注意　注意の成長　注意のトレーニング）
第６章	感覚（sense）：感覚弁別（sensationの定義　五感sensationの弁別　感覚のトレーニング）
第７章	感覚；事物の観察（感覚と知覚　触ること見ること　身体の近く　観察　観察力の発達　観察力のトレーニング）

（次頁へ）

第８章	心的再生：記憶（記憶の条件　連合　近接　類似対比　想起など）
第９章	記憶（つづき）（記憶の成長　記憶の多様性　記憶のトレーニング）
第10章	構成的イマジネーション（構成のプロセス　知的実践的　美的　イマジネーションの発達　イマジネーションの発達　イマジネーションのトレーニング）
第11章	抽象化と概念（知識，思考　概念の性質　概念形成の条件（比較，抽象，一般化））
第12章	抽象化と概念（つづき）（観念の訂正，定義　抽象化の発達　抽象化する力のトレーニング）
第13章	判断と推論（判断の性質　判断のプロセスなど判断と推論の関係　自発的あるいは制御された推論）
第14章	判断と推論（つづき）（演繹的推論　推論能力の発達　推論能力のトレーニング）
第15章	感情（feelings）（感情の性質と効果　喜び　痛み感情発達　子どもの感情の特徴）
第16章	利己的な感情と社会的な感情（恐怖とその教育的なマネジメント　怒り　愛　自尊感情　尊敬と会い　共感）
第17章	抽象的なセンチメント（知的なセンチメント　美的なセンチメント　倫理・道徳的なセンチメント道徳的な判断の発達　各センチメントの発達，成長　各センチメントのトレーニングなど）
第18章	意志：自発的な運動（movement）（意志の性質意志の基礎（欲望）　意志の発達　初期の運動自発的な運動への移行　模倣　命令による運動内的な命令による運動　習慣と運動　身体的な運動による意志のトレーニング）
第19章	道徳的な行為（action）：性格（character）（意志に及ぼす知的発達　感情発達　熟慮　選択　セルフコントロール（衝動）感情　思考　なぜ個人差が生じるか　習慣と行為　性格　意志の教育　権威と服従　道徳律の条件　罰　報酬　自由意志の発達　家庭学校における訓練）
付録	発達の段階　能力の測定

（https://books.google.as/books?id=W_9EAAAAIAAJ&printsec=copyright#v=onepage&q&f=falseにて閲覧可　2021. 10. 12日閲覧）

者は，「Instructor J.P. HYLAN PH.D.」に代わる。ただ，この年度には“Educational Psychology”は開かれていないが，翌1898-1899の年度に再開される。カタログによれば，教育心理学とは，現代心理学の原理や成果を教師のニーズに応じて応用しようというもので，具体的には，記憶，注意，イマジネーション，情動，意志などが対象になることが想定されているようだ。また，子どもとその精神的発達の観察も研究対象となるという記述もある。この教育心理学に対する記述は，今日，一般に教育心理学の在り方として理解されているものに大分近くなっていることがわかる。

1899-1900年度版のカタログではHylanの名前は消え，「Professor Dexter」なる人物が“Pedagogy and psychology”の担当として登場する。また，「心理学関係の科目の詳細は1900年秋に発表される」という記述もあり，何らかの改組が行われている可能性が見て取れる。その後，心理学関係科目は“Experimental Psychology”，“Genetic Psychology”，“Comparative Psychology”など数科目が開講されるが，“Educational Psychology”は結局開講されることはなかった。このような状況は10年ほど続く。

そして，1910-1911年度版のカタログで，ようやく“Educational Psychology”が復活する。担当は，Steven Sheldon Colvin。その内容として「学習の生物学的側面，学習を含んだ心的プロセスの分析，有効な学習のテクニック，教室での諸問題の適用に際しての方法と結果」が列挙され，テキストとして『Colvin's Learning Process.』が指定されている。Hall（2003）によれば，このテキストは多くの研究があまり教条的にならず提示されており，単独の書籍としてはE. Thorndikeのものより人気があったそうである。ここに至り，少なくとも学習領域については，教育心理学が今日のそれに近い体をなしてきていることがわかる。

さらに，1914-1915年度版になると“Educational Psychology”，“Advanced Educational Psychology”，“Seminar in Educational Psychology”，“Elementary Educational Psychology”の４科目が開講されている。

それぞれの講義内容は表２に示した。今日の学習心理学といわれる科目の内容に大分近くなっていることがわかる。この４科目のうち“Elementary Educational Psychology”については大学の単位数には参入しない，としている。なお，この前年度の1913-1914年度版のカタログでは，Summer Sessionの１つとして，“Educational Psychology”が開かれており「このElementary courseはとくにState-certificate examinationsの準備にあわせたような内容となっている」という記載がある。「State-certificate examinations」とは，教員資格の認定試験と思われる(注3)。このころになると，教員養成の基礎科目の１つとして“Educational Psychology”が認知されていた様子がうかがえる。

1919-1920年度版のカタログでは，“Graduation Work”というものもある。これは、おそらく卒業研究ではないかと思われる。教育心理学については，「メンタルテスト・臨床心理学・教育統計・教育想定を含む」となっており，現代の教育心理学に近い。

ちなみに，この時点でのFacultyは「Edward Herbert Cameron, Ph.D., Professor of Educational Psychology, Cornelius Francis Kruse, Ph.D., Associate in Educational Psychology, Frederick Dean McClusky, A.M., Instructor in Educational Psychology」の３名で，准教授以下の２名はその後も入れ替わるが，教授のCameronは，イリノイに長くとどまることになる。

こうしてみるとイリノイ大学における教育心理学の成立史は以下のようにまとめられるのではないだろうか。

まず，1890年前後にそれ以前のスコットランド学派の流れを汲む心理学から脱し，学校教育，教員養成に直接的に関わる心理学の樹立が試みられたものの，必ずしも，それは十分なものとは言えなかった。その後，紆余曲折を経て，1910年代後半になり，教育心理学が今日にもつ

表２　1914-1915年度版のカタログに記載された教育心理学関係科目の内容

講義名	講義内容
Educational Psychology	学習過程の生物学的な解釈，心的発達と遺伝との関係　習慣，スキルの獲得，連合と記憶，転移，思考のプロセスの近年の発達　教科書はColvin's Learning Processを用いる
Advanced Educational Psychology	本能・習慣・スキルの獲得，記憶と連合に関するモノグラフを扱う（1918-1919年度ではThorndikeが集中的に検討された）
Seminar in Educational Psychology（大学院向け？）	（内容に関する記載なし）
Elementary Educational Psychology（公開講座向け）	学習の意味，学習の問題に関わる経験と遺伝，本能の性質と分類，習慣形成の法則，感覚と知覚とその教育的応用，記憶とその法則，イマジネーションと高次の思考

ながる独自の領域として認められ，教員資格の基礎科目としても認知されるようなった，と。以上で，ひとまず，イリノイ大学についてはおくことにしよう。

② イリノイ州立師範大学（Illinois State Normal University；現在のイリノイ州立大学）

つぎに同じイリノイ州の大学でもより教員養成に特化したイリノイ州立師範大学についてみてみる(注4)。イリノイ州立師範学校は1857年創立で，全米の中でも比較的古い部類に属する。その後teachers' collegeを経て現在のliberal art universityに発展した。カタログは創立４年目の1860年以降のすべてが公開されている(注5)。これを年代順にみてゆこう。

いうまでもないことだが，1860年代から70年代半ばにかけて心理学 "Psychology" というタイトルの授業はなく，また，文中の使用例もない。これまでも繰り返し述べてきたように心理学が導入される以前に心理学的なテーマについて扱ってきた科目として道徳哲学（Moral Philosophy），精神哲学（Mental Philosophy）があるが，このうち"精神哲学"が1874年にはじめて開講されている。その部分を訳出ししてみる。

> 精神哲学は教授の理論と技術の基礎をなすものである。⑴用語の説明，心の性質についての広い探求；つまり心とは何か？⑵心における事実，法則，結果とは？知ること，感情，そして，努力するとは？⑶意識，知覚，記憶，想像力，反射的で調整的なパワー。⑷気分，喜びと痛みの理論。これらすべてのトピックが教育の仕事と関連付けられて取り上げられる。テキストはHeaven博士の心理学を基本書として用いる。

J. Havenのテキストとは，『Mental Philosophy』のことであろう。このテキストは，スコットランド学派の流れを汲む"旧"心理学がドイツの能力心理学の影響を受け感情，意志などの領域を含めたものに変化していった過渡期ともいえるこの時代を代表するものである(注6)。しかし，Heavenのテキストは教員養成のために書かれたものではない(注7)。カタログ中で「精神哲学は教授の理論と技術の基礎をなすもの」と述べられているのは，この講義の担当者の授業に対する方針が示されていると考えるべきである。すなわち，イリノイ州立師範学校では，ここにおいてリベラルアーツ的な精神哲学から，教職科目としての教育心理学へむけて舵を切っていたことがわかる。

ところが，翌（1876）年，"心理学"という授業科目（第４学期（２年次１学期のこと）配当）が登場する。カタログの内容も少し書き足される。「心理学とは，他の科学に対する，精神の科学（mental science）である。メンタル・パワー，意識，知覚，概念などの定義と分類を行う」とされる。教科書はHeavenの教科書が使われている。このHeavenのテキストを使った講義は，その後1880-1881，1882-1883にも行われている。

1883-1884年のシーズンではテキストが「Dr. Brooks's text-book」に変わるが，このテキストがどのようなものかは，わからなかった。

やや大きな変化が見られたのは，1889-1890年のシーズンである。カタログの書き出しはこれまでと同じく「心理学とは，他の科学に対する，精神の科学（mental science）である。」という一文ではじまるが，記憶や演繹的推理などについてかなり書き足されている。そして，教科書が「HeWETT'S PSYCHOLOGY.」に変更になっている。

「HeWETT'S PSYCHOLOGY.」とは，イリノイ州立師範大学の学長であったEdwin Hewettによる『Elements of Psychology』（1889）のことであろう。Edwin Hewettは，1822年マサチューセッツ州の生まれで，Bridgewater師範学校で学び1852年に卒業している。Bridgewater師範学校時代にイリノイ州立師範大学の副学長だったRichard Edwards（詳細不明）と知り合い，それがきっかけとなり後にイリノイ師範大学の歴史と地理の教授となり，1876年に学長になっている(注8)。この経歴から見てもわかるように，Hewettは心理学者としての教育を専門的に受けたことはないと思われる。

さて，このHeWETT'Sの『Elements of Psychology』であるが，実は，「Designed for young teachers」という副題がついている。この本の序文で，Hewettは，この本が哲学者やその他研究者のためではなく「教育実践のガイドとして心理学的な知識を使ってみたいと思っているごく一般的な知識をもった若者に向けて」書かれたものだと述べている(注9)。実際，分量も180頁に満たないもので，これが教員養成用のテキストとして執筆されたことがわかる。ただ，目次を見る限り当時の一般的な

心理学のテキストとそれほど大きく変わるところはない。

1892-1893年のシーズンになるとこれまでの第４学期のほか，第７学期，第８学期でも心理学が開講される。ここでは，Mclellan & Dewey（1889）の『Applied Psychology』がテキストとして使用されている。この目次は表３に示した通りだが，心理学的知識の教育への応用が意図されていることが，はっきりとわかる。とくに発達に関する内容は，これまでの心理学のテキストにはほとんど見られなかったものである。

表３　Mclellan, A.J. & Dewey, J『Applied psychology. An introduction to the principles and practice of education.（1889）』Educational Publishing.の目次

第１章	心理学と教師の関係 （教育における心理学の重要性と限界）
第２章	心理的生活の基礎 （感覚，知覚，生理的過程，興味など，以上に関わる教育の諸原理）
第３章	心理的過程 （心の内容，分類，意図的，非意図的な注意，連合など，以上に関わる教育の諸原理）
第４章	知的発達の図式 （表象と知的発達。知的発達の段階，記憶のトレーニング，学習の原理など）
第５章	情動発達の図式 （感情の成長，感情を広げる，意識的，無意識的共感，美的，個人的，道徳的感情ほか）
第６章	意思の発達の図式 （意思の発達，欲求，習慣的行為，自己コントロールほか）
第７章	心身の問題 （体と魂，体と神経系，神経系に関する基礎，機能の局在など，以上に関わる教育の諸原理）
第８章	諸原則のまとめ
第９章	質問の方法，問の発し方
第10章	質問の方法，問の発し方（つづき）
第11章	幼稚園の教育内容の例，公立学校における自己教育

（https://ia802700.us.archive.org/5/items/appliedpsycholog00mclerich/appliedpsycholog00mclerich_bw.pdf にて閲覧可　2021. 10. 12閲覧）

つぎに大きな変化が見られるのは1895-96年のシーズンで，１年次向けに“Elementary Psychology（心理学　初歩）”，２年次向けに“Advanced Psychology（心理学　発展）”が設けられることになる。テキストはMclellan & Dewey（1889）の著書が用いられ，カタログの内容もこのテキストの目次に近いものになっている。これは1898-1899年のシーズンまでほぼ同じ状態が続く。

1900-1901年のシーズンからは大幅なカリキュラム改変が行われたようで，心理学という授業名自体が姿を消すが，教育学関係のオムニバス形式の授業の中で数回ずつ「The Psychology of the Teaching Process」「Method in　Psychology」などの名称の授業が行われるという形がとられる。この方式は途中再度の改変を経て1907-1908年のシーズンまで続く。

1908-1909年のシーズンになりはじめて“教育心理学（Educational　Psychology）”が授業名として登場する。ただし，これは大学院（graduate　course）の授業として倫理学，数学，科学，生物学などとともに開かれたもののようだ。

このつぎに注目したのは1912年のカタログにあった以下のような一節である。

「イリノイ州立師範学校の卒業生は，英語，教育心理学，教授法の方法と原理について試験で十分な成績を修め，認められた教育に関するテーマで論文を執筆し合格することで，生涯有効な教員免許を取得することができる。」

ここでは，“教育心理学”は教職の必修科目，免許取得に必要な科目として扱われていることがわかる。ただ，カタログ中の授業科目は１年次は“初歩の心理学（Elementary Psychology）”が，３年次は“心理学発展（Advanced　Psychology）”と“教育心理学（Educational Psychology）”とが配当されているものの，教育心理学は教育史と併置されいずれかを履修する選択科目となっている。

この授業の内容について訳出ししてみる。

「このコースの目的は，学習と教授における心理学的過程について研究することにある。すなわち，教職希望者あるいは現職教員に対して，教育におけるこの学習の心理学的過程を特定し，それに対する心理学的な対応が望ましい結果をもたらすかを判断するスキルを身に着けることである。このコースはいろいろな授業と関連しているが，中でもコース４と組み合わせて，州の実施する教員資格試験の教育心理学領域の準備のための講座にもなっている。このコースの主たる目的は学習の過程の解明にあるが，それに加えて，興味，連想の生成，好みや偏見，態度が行為に与える影響，そして，形式陶冶について検討が加えてゆく。８週目の授業では実験も行ってみる。事前に受講しておく科目；コース２またはそれと同等の科目を履修しておくこと。１年目の夏学期または冬学期に開講する。教科書はPyleの『Outline for Educational Psychology』を用いる」

冒頭の数行を読んだだけで，以前の教育心理学に関する記述と完全に異なるものであることがわかる。教授学習のプロセスがその中心におかれている点はむしろ現在の教育心理学に近いといえるだろう。教科書として指定されたPyleの『Outline of Educational Psychology』についても一応見ておこう。この書は邦訳もある(注10)。その目次を示した（表４）。本能に関する章が多いのはW. MacDougalを連想させるが，適応，習慣，記憶など，これらは，今日に連なる学習心理学をベースとした教育心理学の登場を思わせるものがある。

1918-1919年度版のカタログになると，より一層，現在の教育心理学に近づいたものとなる。

表４　Pyle著『Outline of Educational Psychology』の目次（福富訳　一部改める）

第１章	緒言	第２章	身体と精神	第３章	遺伝
第４章	本能	第５章	個体本能	第６章	社会的本能
第７章	環境本能	第８章	適応本能	遊戯	
第９章	適応本能	模倣	第10章	習慣	第11章　習慣と教育
第12章	習慣と道徳教育	第13章	記憶	第14章	注意
第15章	思考作用	第16章	疲労	第17章	検査とその標準

まず，“教育心理学（コース40）”では，一般心理学の原理を幼稚園，低学年における問題解決に応用することが目標に掲げられている。テキストとしては，「Texts: King's Psychology of Child Development, Dewey's The School and Society, 1915 edition, Kirkpatrick's Fundamentals of Child Study, Goddard's Revision of the Binet Measuring Scale of intelligence」が挙げられている。これまであまり積極的に取り上げられなかった発達に関する視点が加わっている。

つぎに“教育心理学（コース40A）”では，高等学校，グラマースクールの教師，管理職向けのもので，テキストは，「Thorndike's Educational Psychology, Briefer Course」が指定されている。この授業の趣旨は著者には今一つよくわかないが，青年期を対象とする教師と管理職向けということなのであろうか。うまく話はつながらないがThorndikeのテキストがここではじめて登場する。

さらに“教育心理学（コース41）”では，知能検査，教育測定に関してさらに深めるような内容になっており，テキストは，「Texts: Goddard's Revision of the Binet Measuring Scale of Intelligence, Terman's The Measure of Intelligence, and Monroe, DeVoso and Kelly's Educational Tests and Measurements.」が挙げられている。

このようにしてみるとイリノイ州立師範大学における教育心理学の成立過程についてもおおよそ次のようなことがいえるのではないだろうか。

すなわち，イリノイ州立師範大学では，1890年前後に教育心理学成立の動きがあったものの，それが形をなすことはなかった。今日の教育心理学に直接連なるような内容を備えた教育心理学の授業ができあがるのは，1910年から20年にかけてであった，と。そんなところであろう。

ここまで見た２校には，共通点も見られるが，それが地理的に近いことによるものなのか，もっと大きな流れによるものなのかは，これだけでは何とも言えない。

今回はもう１校検討してみる。

③　ブリッジウォーター師範学校（Bridgewater Normal School；現在のブリッジウォーター州立大学）

ブリッジウォーター師範学校は，1840年，マサチューセッツ州ブリッジウォーターに設置されたアメリカでも最も古い師範学校の１つである。カタログが公開されてカリキュラムがわかるのは1859年以降である(注11)。それ以前の詳細は不明だが，小野（1960）は，初期カリキュラムの中に心理学があったとしている。ただしこれはmental philosophyのことであろう。

現在，公開されている最初のカタログ（1859年版）では，心理学関係の科目として“Mental and Moral Philosophy”がある。この講義の具体的な内容についてカタログにはあまり記述がないが，おそらくは，これまでも述べてきたようにスコットランド学派由来の心理学と近い内容のものが講じられていたと考えられる。

その後，しばらく，同じような状況が続くが，1867年度版からは“Mental and Moral Science”とタイトルが変更されている。1869-1870年度版のカタログでも基本的には同じだが，教授陣の紹介ページがあり，そこに「ALBERT G. BOYDEN, A.M., PRINCIPAL, Rhetoric,. Psychology,. Moral Philosophy,. Didactics; Mineralogy.」とある。このBoydenはその後も長く同校の校長を務めるが，当時，“Mental and Moral Science”はBoydenが担当していたと思われる。気に留めておいてよいのは，psychologyという用語がはじめて使われていることである。この使用例は今回分析した３校の中ではもっとも早い（イリノイ州立師範学校は1876年，イリノイ大学は1890年）。ここでいうpsychologyは，mental scienceのことと思われるが，それをpsychologyと言い換えることができたことを示している。

1870年代に入り５年間ほどほとんど変化はない。1876-1877年度版のカタログの開講科目を列挙した個所では，“mental and moral science”は第４ターム（２年次後期？）におかれている。なお，そこには「including the Principles and Art of Reasoning.（推論の原理と技術を含む）」という短い説明の追加がある。

このすぐ後に「The present Order, Distribution and Range of Studies」という見出しがある。これが何を意味するか必ずしも判然としないが，その前に列挙した開講科目の講義内容の主要項目の紹介と見られる。そこには，mental and moral scienceはなく，psychologyがある。ここでも先ほどと同じようにmental scienceとpsychologyは言い換えが可能なものとして，区別されていない。なお，このpsychologyの主要項目は以下のようなものである。「心理学，―定義；知的パワー，―推論，想起．表象，省察；感受性，―欲求．本能，欲望，情緒；意志と道徳」確かに，この内容はスコットランド学派のmental and moral scienceから，psychologyへの移行期を思わせるものがある。ただ，当時，この例にみられるように多くの大学や師範学校でmental scienceとpsychologyとを区別せず使用していたのか，そうではないのかは，著者には何とも言えない。これも今後の課題の１つとして挙げておく。

1876年から1879年まではほぼ変化なく推移するが，1880-1881年のシーズンではカリキュラムの改革が行われたようで，“Mental Philosophy”，“Psychology”のいずれも単独の科目としては開講されていないようである。ただ，「Science and Art of Teaching, Rhetoric」「Principles of education, as derived from study of psychology」「Definition and division of psychology.」などの記述は散見され，心理学に関する授業が行われていたことはわかる。このような状態は10年ほど続く。

そのような中で1887年度版の授業の詳細について記した部分に次のような記述があった。「２．教育心理学研究（The study of Educational Psychology）．定義；知

的パワー，―推論，想起．表象，省察；感受性，―欲求．本能，欲望，情緒。そして，意志と道徳」。授業内容の項目として「教育心理学（Educational Psychology）」という用語がはじめて登場したのである。しかし，その詳細の説明は前に紹介した心理学のそれと完全に同じものである。これはいったい何を意味するのであろうか。以下は推測に過ぎないのだが，前述のように，この1887年の前年にはHopkinsの『Educational Psychology』が出版されている。そうしたことからもわかるように，このころになるとeducational psychologyという用語が少しずつ関係者の間で知られるようになってきた可能性はある。しかし，まだ，その内容まで十分に理解されていなかったのであろう。急場凌ぎで，名称のみ変更し，内容はそのまま変更しなかったのではないだろうか。

ただ，その後，“Educational Psychology”という名称の授業はしばらく開講されず“Elementary Psychology”などの授業が開かれていた。

以降，数年間は目立った変化はないが，1894年のカタログでは“Elementary Psychology”“Psychology for the Principles of Education”の２科目が開講されている様子がうかがえる。その後，カタログにおける心理学関連科目の扱いは1910年ごろまで目立った変化はなかった。ただ，その間，心理学関連科目が軽視されていたわけでもないだろう。前述のようにブリッジウォーター師範学校の校長Boydenは，単に一師範学の校長であっただけではなく，当時の教員養成教育に大きな影響力をもつ人物でもあった。小野（1987）によればBoydenが1899年，全国教育協会・師範学校部会で示したモデルカリキュラムのなかに「心理学入門（上記のelementary psychologyのこと）」「人間・身体・精神に関しての教育学的研究（上記のPsychology for the Principles of Education に相当する）」の２科目が挙げられている。これを見るとブリッジウォーター師範学校で開講されてきた“elementary psychology”“Psychology for the Principles of Education”の２科目はモデルカリキュムにも反映されていたことがわかる。むしろ，心理学関係科目は定着していたといってよいだろう。

Boydenは前述のように1906年に校長を引退するが，その後も講義は担当し続けた。そして，1910年度版のカタログであるが，スタッフの紹介欄に次のような記述がある。

「ALBERT G. BOYDEN, A.M., Principal Emeritus. Educational Psychology.（アルバート，G．ボイデン名誉校長　教育心理学）」

長年校長をつとめ心理学関係の科目を担当してきたBoydenが名誉校長となり，さらに，教育心理学者を名乗っているのだ。おそらく，このころになると師範学校の心理学担当者は教育心理学者であるという，一般的な認識が広がっていたのかもしれない。

Boydenはここでは教育心理学の担当者として紹介されている。授業科目名としての“Educational Psychology”は1912年度版のカタログから確認され1915年ごろには定着してゆく。Boydenの名前は死去する翌年の1916年度までカタログ上には記載されている（おそらく，急な死去を受けて修正が間に合わなかったのであろう）。

以上が，ブリッジウォーター師範学校における変遷である。“Mental Philosophy”ではじまり，1869年に教育心理学の名称が登場するものの実際に心理学の名称がほぼ固定するのは90年代，そして，教育心理学の名称が定着するのは1910年代という変遷は，前に検討した２校と近いものがある。ただ，ブリッジウォーター師範学校の場合，内容的な面よりも時代に即応して名称を変更させてゆくような雰囲気が見て取れること，校長Boydenの影響力の強さを考慮しなくてはならないこと，などやはり，個別の事情もあるように思われる。

結びにかえて

本稿は前報，前々報に続き教育心理学の起源と初期の発展の歴史について，著者なりに史料にあたり知りえたことを報告したものである。今回は，大学の教員養成課程，および，師範学校，合計３校のカリキュラム中における心理学関連科目の変遷を，各校のカタログを通覧することで，検討した。その結果，⑴３校とも1860年代から“Mental Philosophy”等の名称で心理学関連科目が配置されていたが，これらは，スコットランド学派の流れを汲む心理学から新しい心理学に入れ替わる過渡期的なもので，今日一般に考えられているような教育心理学とは全く異なるものであった。⑵1880年代から1890年代にかけて，“Psychology”や一部で“Educational Psychology”という名称で授業が開講されるなど，心理学が積極的に取り入れられ始められるが，一定の形で定着を見るには至らず，⑶今日の教育心理学とほぼ近い形で“Educational Psychology”が開設されるようになったのは，1920年近くになってからであった，といった点で共通性も見られたが，実際は各校個別の背景も大きく影響しており，現段階で，これを結論として収斂させることが可能かといえば，そううでもないだろう。はじめにも述べたように，19世紀末から今日に至るカタログを広く公開している旧師範学校，師範大学等はその数20校程度に上り，まずは，それらすべての分析が必要だからである。しばらくは，地道な作業を進めてゆくことになる。

注

（注１）https://digital.library.illinois.edu/items/3f897700-5cda-0132-3334-0050569601ca-3　1867-1900年度までのカタログ（2021. 10. 13. 閲覧）
https://libsysdigi.library.uiuc.edu/OCA/Books2010-02/annualregister/　1879-1947年度までのカタログ（2021. 10. 13. 閲覧）

（注２）1886年と言えば，Hopkinsによって最初の『Educational Psychology』というbookletが出版された年でもある。それのことを思い出してみれば，まだ，educational psychologyという用語さえ普及していなかったこの時点で，『Teachers' Handbook of Psychology』のような400頁を越える大著が出版されていたとは驚くべきことでもある。

（注３）アメリカにおける教員免許等の資格の整備は州単位で行われたようだが，必ずしも，早くから整備されたものではなく，「教師養成機関における教育を免許授与の前提とする州は1897年になっても全米でも半数程度」だったそうである（佐久間，2017，p. 297）。

（注４）https://education.illinoisstate.edu/about/history.php（2021. 10. 13. 閲覧）

（注５）https://library.illinoisstate.edu/collections/course-catalogs/（2021. 10. 13. 閲覧）

（注６）J. Heavenのテキスト『Mental Philosophy』については第１報（大芦，2020）でも触れたし，また，宇津木（2014）による論考もあるのでそれらを参照されたい。

（注７）ところで，本稿の執筆が半ば終わろうとしていたとき，偶然，Havenの『Mental Psychology』と，西周によるその翻訳をめぐって興味深い論考（安斎，2019）があることを知った。それによれば，Havenの『Mental Psychology』をはじめとしたこの時代の心理学のテキストといわれるものは，基本的には教育心理学を志向したものであるが，その内容は発達や学習を中心とした今日の教育心理学とは異なるのだという。この安斎の論考によると，西によるHavenの『Mental Psychology』の翻訳（1875-1876年）の出版は文部省によって行われ，それが東京師範学校でテキストとして使用されたそうだ。確かに，こうしたエピソードからも，当時，このテキストが教員養成のための心理学のテキストとして書かれたことをうかがわせる。一方，著者は前々報（大芦，2020），前報（大芦，2021）においてアメリカの師範学校で開講されていた精神哲学や道徳哲学がむしろリベラルアーツ的な方向を志向していたものと理解していたが，その理解は，いまここで紹介した安斎の見方と相容れないようにも思える。これをどう考えるかは今後の課題の１つとなろう。なお，この論考によれば1885年に有賀長雄著『教育適用心理学』，1889年には塚原政次著『教育心理学』というタイトルの著書がそれぞれ刊行されているとのことである。前者はHopkinsの『Educational Psychology』が刊行された年に，そして，後者はイリノイ大学で講義科目“Educational Psychology”が開講された年にそれぞれ１年先立つ。当時の状況を考えれば，わが国の学会，教育界における教育心理学の受容が極めて速いスピードで行われたといってよいだろう。

（注８）Illinois State Normal University　1905 The Index. Illinois State University Milner Library. Illinois State Normal University, Normal IL.による。https://archive.org/details/index1905illi/page/74/mode/2upにて閲覧可能。（2021. 10. 13. 閲覧）

（注９）https://archive.org/details/elementsofpsycho01hewe/page/n7/mode/2upにて閲覧可能（2021. 10. 13. 閲覧）

（注10）Pyle, W.H. 1911 The outlines of educational psychology: An introduction to the science of education Warwick & York. 福富一郎（訳）1921　教育心理学概論　中文館書店

（注11）https://vc.bridgew.edu/bns_catalogs/にて閲覧可能（2021. 10. 13. 閲覧）

引用文献

安斎順子　2019　西周と教育心理学の関係性，法政大学教職課程年報，18，22-27.

Bolles, R.C. 1993 *The story of psychology: A thematic history*. Wadsworth.富田達彦（訳）2004 心理学物語：テーマの歴史　北大路書房

Charles, D.C. 1976 A historical overview of educational psychology. *Contemporary Educational psychology*, 1, 76-88.

Charles, D.C. 1987 The emergence of educational psychology. In J.A. Glover, & R.R. Ronning eds. *Historical foundation of educational psychology*, Plenum. Pp. 17-38.

Hall, V.C. 2003 The Founding Period: 1890 to 1920. In B.J. Zimmerman and D.H. Schunk（Eds.）*A Century of Contributions: A Project of Division 15*（*educational Psychology*）*of the American Psychological Society*. Lawrence Erlbaum Associates Publishers. Pp 3-40.

大芦　治　2020　教育心理学史序説―第１報―　千葉大学教育学部研究紀要，68，25-31.

大芦　治　2021　教育心理学史序説―第２報―　千葉大学教育学部研究紀要，69，33-40.

小野次男　1960　成立期におけるマサチューセッツ州立師範学校について　日本の教育史学，３，120-147.

小野次男　1987　アメリカ州立師範学校史―マサチューセッツ州を主とする史的展開　学芸図書

Reisman, J.M. 1982 *A history of clinical psychology*. Kreger. 茨木俊夫（訳）1991　臨床心理学の歴史　誠信書房

佐久間亜紀　2017　アメリカ教師教育史―教職の女性化と専門職化の相克―　東京大学出版会

宇津木成介　2014　ジョセフ・ヘイヴンの『心理学』：訳者西周と，少しだけヴェブレンについて　奈良学園大学紀要，１，149-159.